

東京都内湾水生生物調査

地点名	三枚洲(荒川河口)	調査年月日	令和3年9月13日	9:54 ~ 10:40
-----	-----------	-------	-----------	--------------

<調査地点>



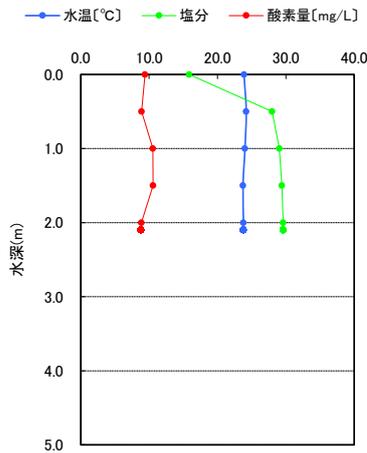
<底質状況、底生生物出現状況>



荒川と旧江戸川の河口に残された天然の浅場。調査時の水深は3.1mであった。すぐ横は東京ディズニーリゾートである。



ふるい上には貝殻片は残ったが、一昨年の台風による大規模な出水以降、多量に夾雑していた植物片は無かった。



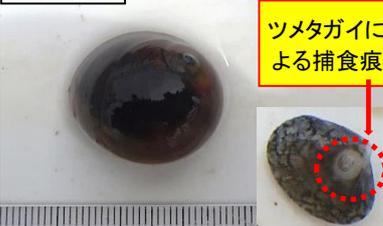
※写真のスケール1目盛: 1mm

底質の状況



底質は砂で、表層5cm程シルトが堆積していた。本地点は本来細砂だが、一昨年の台風以降はシルト主体へと変化していた。今回再び砂主体となり、底質は回復傾向にある。

ツメタガイ



砂泥底の浅海に多く生息する、中型の巻貝。肉食性で、やすり状の歯舌でアサリ等の殻に穴を開け、中の肉を溶かして食べる。

クチキレガイ



殻長15mm程の整った円錐形の巻貝。潮通しのよい砂泥底に生息する。本種は台風以前の一昨年9月の調査以来の出現で、底質同様に生物相も回復傾向と考えられる。

アラムシロガイ



殻高15mm程になる。殻の表面には粗い粒状突起が並ぶ。干潟から水深3mの砂泥底に生息する。魚や貝の死骸を食べる性質があり、「海の掃除屋」と呼ばれている。

シノブハネエラスピオ



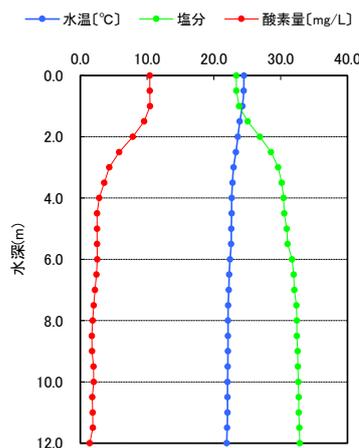
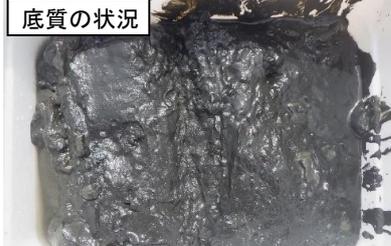
多毛類の一種で、3対の鰓がある。貧酸素環境に耐性があり、有機汚濁指標種となっている。ハネエラスピオの仲間は日本では4種類が知られている。

イトゴカイ科

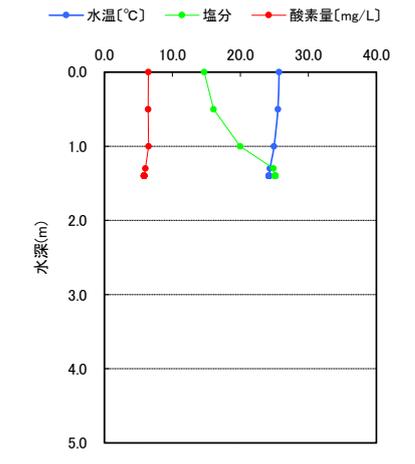
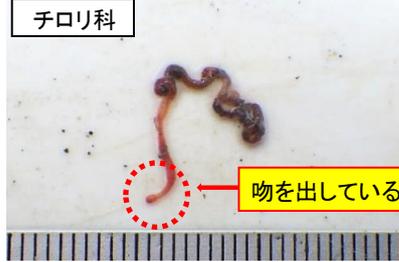


有機物の多い底質を好む多毛類。有機物を分解する能力に優れ、海底を浄化する。画像の黒い点々はフンである。

東京都内湾水生生物調査

<p>地点名</p>	<p>St.6</p>	<p>調査年月日</p>	<p>令和3年9月13日</p>	<p>10:56 ~ 11:33</p>
<p><調査地点></p> 		<p><底質状況、底生生物出現状況></p>		
		 <p>東京港フェリーターミナルの正面で採泥を行った。航路であるため、水深は13.5mと深い。今回は水深2m前後から急激に酸素量が減り、海底付近では1.1mg/Lと貧酸素の状態であった（貧酸素状態:2.0mg/L以下※）。 ※出典: 貧酸素水塊速報</p>		
<p>※写真のスケール1目盛: 1mm</p>		 <p>ふるい上には大小さまざまな貝殻片が残った。今回の調査では生体は確認されなかった。</p>		
<p>底質の状況</p> 	<p>泥臭の確認</p> 	<p>ムラサキガイ(死殻)</p> 		
<p>底質はシルトで、とても柔らかいクリーム状である。</p>	<p>採取した底泥の臭気を確認すると、硫化水素臭(腐った卵のような臭い)がした。</p>	<p>東京湾では代表的な付着生物で、港湾の防波堤等に高密度に付着する。夏季の高水温や貧酸素化にともなう大量へい死により、水質・底質の悪化を引き起こすことがあ</p>		
<p>カガミガイ(死殻)</p> 	<p>タマガイ科(死殻)</p> 	<p>ゴイサギ(死殻)</p> 		
<p>殻長7cm程度になる。殻は白色で殻質はやや厚い。内湾の干潟から水深20mの砂泥底にやや深く潜って生活する。多毛類の一種、カンザシゴカイ科の棲管が付着していた。</p>	<p>ツメタガイ含め、タマガイ科は肉食性である。大きい軟体部で餌となる貝を覆い、殻に穴を開けて捕食する。</p>	<p>殻長5cm程度になる。水深50mまでの砂泥底に生息する。平べったい殻は白く光沢がある。</p>		

東京都内湾水生生物調査

地点名	森ヶ崎の鼻	調査年月日	令和3年9月13日 11:54 ~ 12:25	
<調査地点>		<底質状況、底生生物出現状況>		
		 <p data-bbox="1230 302 1497 488">羽田空港の北側に残された干潟。干潮時でも周りは「海」に取り囲まれているため、岸から歩いて入ることはできない。</p>		
		 <p data-bbox="1230 696 1497 757">ふるい上には貝殻片が少し残った。</p>		
※写真のスケール1目盛:1mm				
<p data-bbox="256 1198 384 1234">底質の状況</p> 		 <p data-bbox="1086 1198 1257 1234">ホンピノスガイ</p> 		
<p data-bbox="247 1467 464 1503">底質は細砂である。</p>		<p data-bbox="667 1467 1038 1525">調査時、干潟は干出していなかった。</p>		
<p data-bbox="256 1675 368 1711">チロリ科</p> 		<p data-bbox="683 1675 826 1711">カワゴカイ属</p>  <p data-bbox="1098 1675 1257 1711">ヤマトシジミ</p> 		
<p data-bbox="247 1944 646 2069">大きいもので体長15cm程度になる多毛類。獐猛で、4つの鋭い牙(顎)がついた吻を出し、干潟の小動物を捕らえる。</p>		<p data-bbox="673 1944 1066 2069">全国の干潟に生息する。カワゴカイ属は、昔、ゴカイと呼ばれていた種類である。今は3種類に分けられている。</p> <p data-bbox="1086 1944 1497 2069">汽水域にのみ生育するため、河口域に生息するものは出水等の影響を受けやすい。今回、本地点で採取されたのはこの1個体のみであった。</p>		

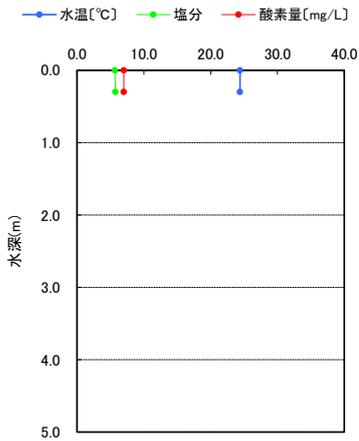
東京都内湾水生生物調査

<p>地点名</p>	<p>St.31(多摩川河口)</p>	<p>調査年月日</p>	<p>令和3年9月13日</p>	<p>12:44 ~ 13:31</p>																												
<p><調査地点></p>		<p><底質状況、底生生物出現状況></p>																														
		 <p>多摩川河口付近の浅場で調査を行った。</p>																														
<table border="1"> <caption>水深別の水質データ</caption> <thead> <tr> <th>水深 (m)</th> <th>水温 (°C)</th> <th>塩分</th> <th>酸素量 (mg/L)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>0.0</td> <td>~25</td> <td>~10</td> <td>~1.0</td> </tr> <tr> <td>1.0</td> <td>~25</td> <td>~15</td> <td>~1.5</td> </tr> <tr> <td>2.0</td> <td>~25</td> <td>~20</td> <td>~2.0</td> </tr> <tr> <td>3.0</td> <td>~25</td> <td>~25</td> <td>~2.5</td> </tr> <tr> <td>4.0</td> <td>~25</td> <td>~30</td> <td>~3.0</td> </tr> <tr> <td>5.0</td> <td>~25</td> <td>~35</td> <td>~3.5</td> </tr> </tbody> </table>		水深 (m)	水温 (°C)	塩分	酸素量 (mg/L)	0.0	~25	~10	~1.0	1.0	~25	~15	~1.5	2.0	~25	~20	~2.0	3.0	~25	~25	~2.5	4.0	~25	~30	~3.0	5.0	~25	~35	~3.5	 <p>ふるい上には細かい貝殻片が残った。</p>		
水深 (m)	水温 (°C)	塩分	酸素量 (mg/L)																													
0.0	~25	~10	~1.0																													
1.0	~25	~15	~1.5																													
2.0	~25	~20	~2.0																													
3.0	~25	~25	~2.5																													
4.0	~25	~30	~3.0																													
5.0	~25	~35	~3.5																													
<p>※写真のスケール1目盛:1mm</p>																																
<p>底質の状況</p> 		<p>採泥状況</p> 		<p>アサリ</p> 																												
<p>底質は細砂で、シルト(柔らかい泥)が混じる。</p>		<p>水深が1.9mとやや深いため、船上からスミスマッキンタイヤ型の採泥器を用いて採泥した。</p>		<p>殻長4cm程になる。潮干狩りなどで盛んに獲られている代表的な二枚貝。東京湾のものは形が細く、模様のコントラストが強いものが多い。今回、小型の個体が多く採取された。</p>																												
<p>サクラガイ</p> 	<p>シズクガイ</p> 	<p>マテガイ</p> 																														
<p>殻長20mm程の桃色の殻が特徴的な二枚貝。内湾の干潟から水深30mの砂泥底に生息する。近年、各地で個体数が減少傾向にある。昨年度の調査では三枚洲で確認された。</p>	<p>半透明の薄く壊れやすい殻を持つ小型の二枚貝。貧酸素耐性があり、無酸素状態でも水温25℃であれば1日間生存できる。有機汚濁の指標種の一つとされている。</p>		<p>大きなものでは10cm以上になる縦長の二枚貝。砂底に縦穴を掘って潜るが、急激な塩分の変化などの刺激を受けると飛び出すことが知られている。生活環境が良くないと移動する。</p>																													

東京都内湾水生生物調査

地点名	多摩川河口干潟	調査年月日	令和3年9月13日	13:43 ~ 14:10
-----	---------	-------	-----------	---------------

<調査地点>



<底質状況、底生生物出現状況>



多摩川左岸側(東京都側)の海老取川河口付近の干潟で調査を行った。



ふるい上には大小の貝殻片が残った。

※写真のスケール1目盛:1mm

底質の状況



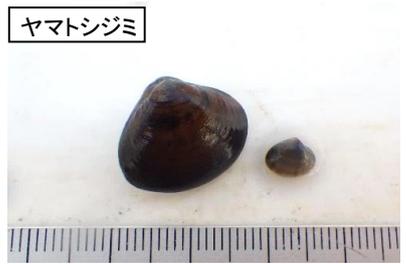
底質は細砂で、シルトが少し混じる。

採泥状況



調査時、干潟は干出していなかった。

ヤマトシジミ



※解説は森ヶ崎の鼻を参照。本地点で前回は5個体以上出現したが、今回は2個体のみであった。

ヒモムシ



文字通り、紐状の生物であり、とてもちぎれやすい。肉食性で、生きた多毛類等を体内に収納している吻を伸ばして捕食する。

ムロミスナウミナナフシ



体長2cm程になる、フナムシに近い仲間。細長い円筒状の体をしており、白地に褐色の斑紋がある。干潟の表層部に巣穴を掘って生活する。

ヤマトオサガニ



甲幅4cm程度になり、柔らかく水分の多い泥干潟に斜めの穴を掘って巣穴を作る。巣穴の入り口には放射状の浅い溝ができる。鳥類の重要な餌である。